

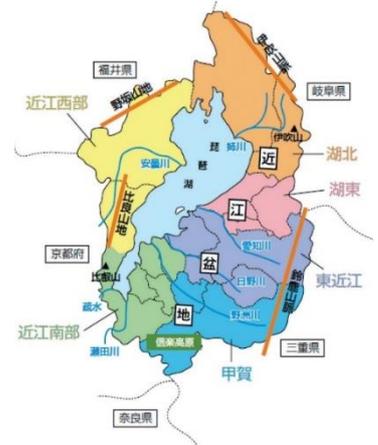
巻末資料② 滋賀県・琵琶湖の特徴

滋賀県の特徴

本県は日本列島のほぼ中央に位置し、北は福井県、東は岐阜県、南東は三重県、西は京都府と接しています。

面積は国土の総面積の約1%を占めており、中央には県土の総面積の約6分の1を占める、わが国最大の湖である琵琶湖があり、周囲を伊吹、鈴鹿、比良など1,000mを超える高い山々に囲まれています。

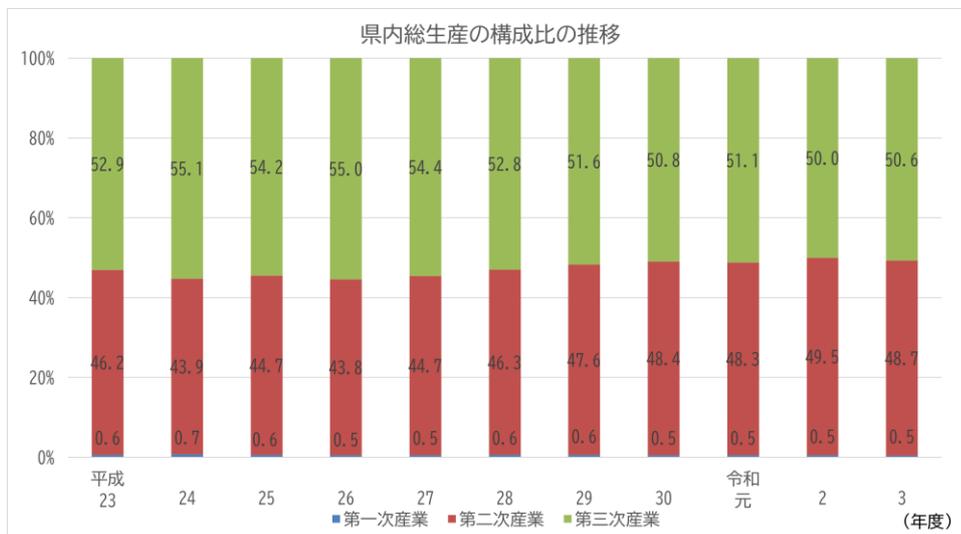
琵琶湖の周辺はこれらの山々から流れ出る大小の河川が扇状地や三角州をつくりながら湖に注ぎ、近江盆地を形成しています。



● 産業構造

<商工政策課>

本県は全国有数の内陸工業県であり、県内総生産に占める第二次産業の割合は48.7%（令和3年度）となっています。



※県内総生産には「輸入品に課される税・関税」「(控除) 総資本形成に係る消費税」が含まれるため、合計は100%とはなりません。

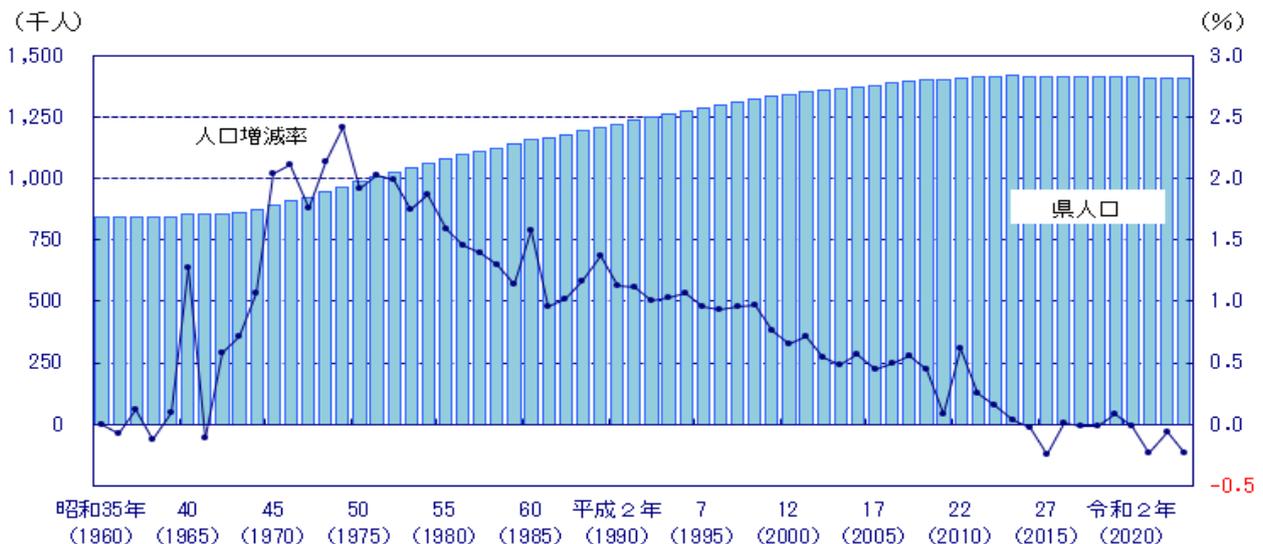
【出典：滋賀県統計課「令和3年度滋賀県民経済計算」】

● 人口の変化

<統計課>

令和5年（2023年）10月1日現在の滋賀県人口は1,406,103人です。

本県の人口および増減率



出典：【国勢調査および滋賀県毎月人口増減調査結果】

琵琶湖の特徴

<環境政策課>

琵琶湖の最も狭くなったところに琵琶湖大橋があり、これより北側を北湖、南側を南湖といい、両者は様々な面で性格が異なっています。

琵琶湖には、大小約 460 本の河川が流れこみ、瀬田川と人工の琵琶湖疏水から流れ出します。計算上、湖の水が全部入れ替わるには約 19 年かかります。

琵琶湖は日本最古の湖でもあります。今の湖は約 100 万年前にでき始め、祖先となる湖を含めるとおよそ 440 万年もの歴史をもつ世界有数の「古代湖」です。長い歴史と変化に富む環境をもつ琵琶湖は生物相が豊かで、約 1,600 種の動物と約 1,400 種の植物が生息し、ビワマスやセタシジミなどの固有種も多く見られます。

■ 古代湖

例外的に寿命の長い湖で、多くの固有種が進化する場です。バイカル湖やタンガニイカ湖など、世界中で 20 ほどの湖が古代湖として知られています。

■ 固有種

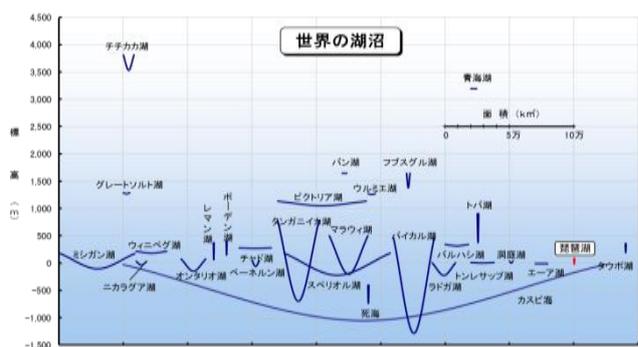
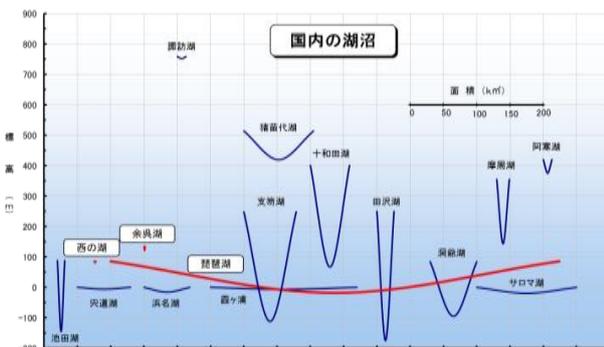
限られた地域・水域にしか分布しない生物のこと。琵琶湖は、日本でも抜きん出て固有種の多い湖で、60 種以上が知られています。

◆琵琶湖の概要

琵琶湖の集水域		3,174km ²
琵琶湖の大きさ	面積 (※)	669.26km ² (北湖:南湖=11:1)
	南北の延長	63.49km
	最大幅	22.8km
	最小幅	1.35km
	周囲	235.20km
水深	最も深いところ	103.58m
	平均の深さ	約 41.20m
貯水量		275 億 m ³ (北湖 273 億 m ³ 、南湖 2 億 m ³)

※総面積は、国土地理院「令和6年全国都道府県市区町村別面積調(4月1日時点)」の数値を引用。

国内のおもな湖沼の特徴(面積、深さ、標高)の比較(左の図)と
世界のおもな湖沼と琵琶湖の特徴(面積、深さ、標高)の比較(右の図)



琵琶湖の価値

琵琶湖の豊かな自然環境としての価値、水源としての価値を守り育てることは、健全な生態系と安全・安心な水環境のため、とても重要です。

また、日々の暮らしの中で、私たちは琵琶湖の水産業の場としての価値、観光資源としての価値、学術研究の場としての価値に触れ、その恩恵を受けています。これらは人の暮らしと琵琶湖の関わりを再認識させてくれる大切な琵琶湖の価値です。

● 古代湖としての価値

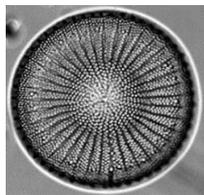
<琵琶湖博物館>

琵琶湖はおよそ440万年の歴史をもつ古代湖です。琵琶湖周辺から三重県伊賀市付近の丘陵に、湖沼や河川で堆積した古琵琶湖層群という地層が分布しています。この一連の地層は堆積年代によって分布地が異なっていますが、途切れずに現在の琵琶湖湖底の堆積物まで積み重なっています。その中で最も古い地層付近で見つかった火山灰層の年代とその下にある地層の厚さから、およそ440万年前である事が明らかになりました。また、これまで、琵琶湖の固有種は現在の琵琶湖が形成されはじめたおよそ40万年前以降に誕生したと考えられていましたが、DNA分析の結果から種類によってはそれ以前に誕生した可能性が出てきています。まさに、生息する固有の生物の進化の舞台となっています。

◆琵琶湖水系に生息する固有種

プランクトン (2種)

- スズキケイソウ
- ニッポンイトケイソウ



スズキケイソウ

寄生動物 (4種)

- 吸虫類 (1種)
- 条虫類 (2種)
- 線虫類 (1種)

水草 (2種)

- ネジレモ
- サンネンモ



ネジレモ

魚類 (17種)

- ビワマス
- アブラヒガイ
- ビワヒガイ
- ホンモロコ
- スゴモロコ
- ビワコオオナマズ
- イワトコナマズ
- イサザ
- ビワヨシノボリ
- オウミヨシノボリ

- ヨドゼゼラ
- ワタカ
- ゲンゴロウブナ
- ニゴロブナ
- ウツセミカジカ
- オオガタスジシマドジョウ
- ビワコガタスジシマドジョウ

底生動物 (40種)

- オオツカイメン
- ビワオオウズムシ
- ビワコツボカムリ
- ビワミジンコ
- ビワカマカ
- ナリタヨコエビ
- ビワコエグリトビケラ
- ナガタニシ
- イワトコタニシ
- ビワコミズタダミ
- アザイカワニナ
- タテヒダカワニナ
- イボカワニナ
- ヤマトカワニナ
- カゴメカワニナ
- シライシカワニナ
- サザナミカワニナ
- セタシジミ

- カワムラヒメウズムシ
- イカリビル
- アナンデールヨコエビ
- ビワコシロカゲロウ
- クロカワニナ
- ケショウカワニナ
- シノビカワニナ
- チクブカワニナ
- コンペイトウカワニナ
- トキタマカワニナ
- モリカワニナ
- ナカセコカワニナ
- オオウラカワニナ
- タテジワカワニナ
- タケシマカワニナ
- イケチョウガイ
- オトコタテボシガイ
- オグラヌマガイ
- カワムラマメシジミ
- オウミガイ
- ヒロクチヒラマキガイ
- カドヒラマキガイ



ニゴロブナ



ホンモロコ



セタシジミ



アナンデールヨコエビ

出典: Kawanabe H., Nishino M. and Maehata M. (eds) (2020) 'Lake Biwa:

Interactions between Nature and People, 2nd ed.', Springer

西野真知子 (編) (2022) 琵琶湖の生物いつ、どこからきたのか、サンライズ出版

● 水源としての価値

<琵琶湖保全再生課>

琵琶湖は、本県をはじめ京都府、大阪府、兵庫県の近畿約 1,450 万人の水道水源であり、その他農業用水・工業用水などにも利用されています。



府県名	平成30年度 琵琶湖水利用 区域内給水人口
滋賀県	1,204,862人
京都府	1,803,492人
大阪府	8,811,011人
兵庫県	2,973,669人
合計	14,793,034人 約1,450万人*

※10万人以下を、50万人単位で切り捨て。

・上記区域図は、イメージ図です。

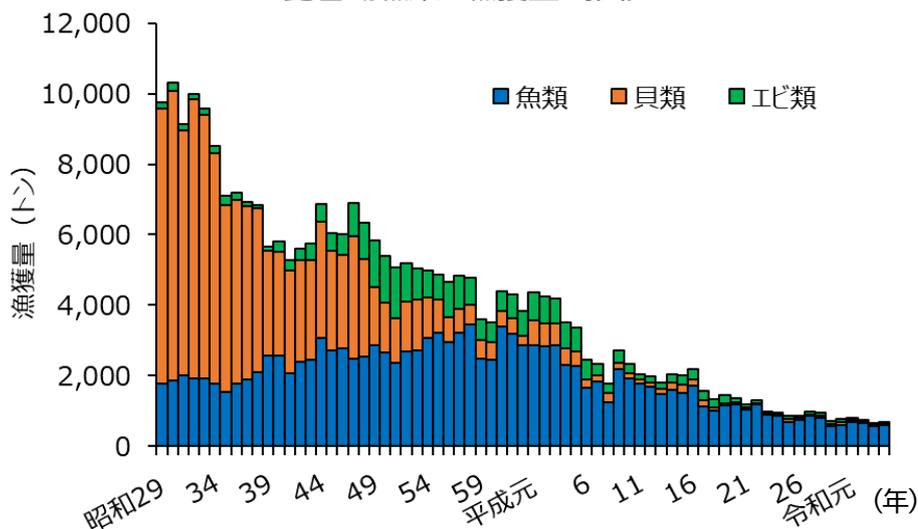
● 水産業の場としての価値

<水産課>

コアユ、ニゴロブナ、ホンモロコ、ピワマスなどの魚類をはじめ、セタシジミ、スジエビなど、令和4年（2022年）には701t（外来魚を除く）の水揚げがありました。前年から31t増加しました。

琵琶湖の魚介類は独特の漁法で獲られ、ふなずしなどのなれずしや湖魚の佃煮、あめのうお御飯などの伝統食として本県の産業や食文化を支えています。

琵琶湖漁業の漁獲量の推移



● ラムサール条約登録湿地としての価値

琵琶湖は、平成5年（1993年）に「ラムサール条約（特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）」の登録湿地となりました。平成20年（2008年）には、県内最大の内湖である西の湖および長命寺川が拡大登録されました。

<自然環境保全課>



ラムサール条約登録湿地（西の湖）

● 観光資源としての価値

サイクリングで琵琶湖を一周したり、県内各地の観光地などを周遊する「ピワイチ」のほか、SUPなどの湖上アクティビティ、琵琶湖でのエリ漁体験などで感動を与え、人々を魅了します。琵琶湖は身体と心を整える、本県の大切な観光資源です。

<観光振興局>



びわ湖花火大会

● 祈りと暮らしに関わる遺産としての価値

古来、水は穢れを除き、病を癒すものとして祀られてきました。仏教の普及とともに東方の瑠璃色に輝く「水の浄土」の教主である薬師如来が広く信仰され、琵琶湖は「水の浄土」として見立てられました。その周囲には多くの寺社が建立され、今日も多くの人々の心を引き付けています。また、琵琶湖の周囲で営まれる人々の暮らしの中には、山から水を引いた古式水道や湧き水を使いながら汚さないルールが伝わっています。湖辺の集落や湖中の島では、鮎ずしなどの独自の食文化やエリなどの漁法が育まれました。水郷や水辺の景観は古くから芸術や庭園に取り上げられ、近年では水と人の営みが調和した文化的景観として現代の人々を引き付けています。琵琶湖とその水辺景観には日本人の高度な「水の文化」の歴史が集積されています。

<文化財保護課>



沖島

● 学術研究の場としての価値

琵琶湖は生物・生態系、湖底遺跡などの学術研究の場となっており、本県の試験研究機関だけでなく、大学なども研究機関を設置し、各種研究を行っています。

<環境政策課>



湖上での調査